

鹿児島大学のASEAN地域における展望 —ASEAN地域の開発の歴史・現在と協力展開の可能性—

高間 英俊

鹿児島大学国際戦略本部プログラム・ディレクター教授

Perspective of Kagoshima University in ASEAN Countries
TAKAMA Hidetoshi
Program Director, KU Center for International Planning

Abstract

Since the early 1980s, I have been involved in Development in Asia and South Pacific areas. I moved to this position at KU in May, 2006. Before then I had worked for technical cooperation among ASEAN countries, and between Japan and those countries. This time I would like to discuss this above title with my view which I have conceived through my career in Asia.

If we look at the Kagoshima University's Primary Principles at the KU's web site, it is found that KU is willing to work not only locally but also in globalization in research and education aspects. It is believed that KU has a unique historical and geographical background. In fact, KU is characterized as a best study/research place of ocean/island sciences throughout Japan because of its excellent location. Although KU has made much collaboration with ASEAN countries either through receiving students from that area or through sending our personnel to that area, KU managed a large scale project at Malaysia University of Agriculture (UPM) with JICA in early 80s. For the project KU sent 9 experts and received several Malaysian young counterparts. KU sent back those students with higher education and degrees to UPM. Today, those ex-KU students actively work for various universities throughout Malaysia. Following this project, Phase 2 project at UPM started in 1998 for 5 years and again KU sent its teaching staff as JICA experts.

However, today many people do not know about this project of good old days within KU. This is probably because 1) there may be no continuity after its termination such as lack of a proper follow up system, and 2) there may not have been enough information shared in and out of KU.

Turning our eyes to ASEAN, its socio-economic integration has today been accelerated greatly. At the last summit meeting in Cebu, the Philippines determined that the economic integration will be made until 2015. However, there are and will be much economic and political disparities existing among ASEAN countries. The disparity can be shown not only between original ASEAN members i.e. Indonesia, Malaysia, the Philippines, Singapore, and Thailand, and new comers i.e. Cambodia, Laos, Myanmar, Viet Nam, but also among original member countries. These facts may make its integration more difficult.

Regarding past regional development in the subregional level in ASEAN, first the Growth Triangle in Indonesia, Malaysia and Singapore in 1970's. was successful. The next one in the 1980's was the Growth Triangle in southern Thailand, northern Malaysia and northern Sumatra, Indonesia, which was not successful. In the early 1990's GMS, in shortened Greater Mekong Subregion, initiated by ADB started. This area is expected to be one of the most prosperous subregions in ASEAN. The GMS development area comprises Viet Nam, Cambodia, Laos, Thailand, Myanmar and two southern provinces of China.

There is another subregional development initiative called BIMP-EAGE covering Brunei, North/East Indonesia, Eastern Malaysia and Southern Philippines. This initiative emerged at the same time of GMS. Since it started, there has been less interest in it because the area is far from the capitals and contains many scattered islands. However that area has plenty of resources with bio-diversity but this kind of regional integration has borne various problems crossing borders, but in other words, they are development issues.

Kagoshima University is one of large scaled national universities with 8 faculties and it is serving to its region i.e. Kagoshima Prefecture as well ASEAN region. I am sure that KU can challenge most development issues in ASEAN through its integrated approach.

Lastly this time I would like to suggest KU for its successful global initiatives, as follows.

- Should form clusters throughout the University such as bio-diversity and island development involving Science, Agriculture, Fishery, Medicine, and Engineering.
- Research Center for the Pacific Islands should have its initiative to promote integrated projects.
- Should carry out small scaled projects at the beginning and then do the big ones last.

私は、2006年4月までタイのバンコクで、ASEAN地域への日本のODA（政府開発援助）の企画の仕事をしていました。これまで、私は20数年間アジア開発問題及び10数年間太平洋地域の島嶼問題に関わってきました。その経験を踏まえて、鹿児島大学とアジア太平洋地域との関わりとその国際戦略を次により論じてみたいと思います。

1. 鹿児島大学の理念と中期計画
2. 国際交流から国際開発へ
3. 「ASEAN+J」とASEAN地域の開発
4. ASEAN地域の地域課題
5. 鹿児島大学の戦略的展望

1. 鹿児島大学の理念と中期計画

鹿児島大学は、本学が所在する鹿児島・南西諸島周辺と地理的に類似性を有する東南アジア・太平洋地域に数々の国際貢献をしてきた経験を有している。大学の理念や平成16年度の国立法人化と同時に始まった中期計画（平成16年度から21年度までの6年間）にも、次のように記載されている。

鹿大の使命の項

「国際的視点を堅持しつつ地域社会に密着し、その発展に貢献することを通じて、
…地球環境の保全に留意した維持可能でかつ公正な社会の発展に寄与する。」

中期目標（平成16年度～平成21年度）

- ・前文総合的部分「地域の特徴を活かした重点的な研究を通して、地域社会と国際社会に貢献する世界的な学術拠点を目指す。」
- ・教育に関する基本的目標「高度な専門知識・技術・技能を有し、国際的に活躍できる人材、研究者を養成する。」
- ・研究に関する基本的目標「世界トップレベルに研究成果を生み出し、『世界の鹿児島大学』を目指す。」
- ・国際交流に関する基本的目標「東アジア、東南アジア及び南太平洋諸国の大学を中心に、広く海外の大学、国際機関との連携を深め、国際交流を積極的に進める。研究者・学生の双方向交流及び国際共同研究を一層推進するとともに、受け入れ体制を整備し、世界各国から研究者及び留学生を積極的に受け入れる。」

このように、「国際」、「世界」、「アジア」など言葉が並んでいるが、

（鹿児島地域あるいは鹿児島大学の歴史とリソース）→（東アジアと東南アジアに研究教育の場）としたいということだと思う。

2. 国際交流から国際開発へ

鹿児島大学の国際交流の沿革について「鹿児島大学50年史」より、主なものを拾う。

- ・昭和50(1975年)年代を前後として大学を取り巻く世界の情勢が、国際化の方向へ転化してきた。
- ・1977年から1980年 マレーシア大学との学生教師との交流。これの実績から、マレーシア農科大学のJICAプロジェクト参加。
- ・1979年ジョージア大学と交流協定がはじめて結ばれた。
- ・1981年 南方海域研究センター設立
- ・1988年南太平洋海域研究センターへ再編成
- ・1998年多島圏研究センターへ再編成
- ・80年代鹿児島丸をはじめとする練習船で南方海域に学術調査・実績を残す。

その交流活動は、1980年代より、本格的に進められた。1984年から89年マレーシア農科大学のJICA人造りプロジェクトでは、9名の鹿大の教官が専門家として派遣された(うち3名は長期)。その後第2フェーズとして、1998年から2003年まで同大学のマラッカ海峡の環境調査プロジェクトにも協力した。両プロジェクトでは、鹿大教官のもとで、現地でも鹿児島でも一生懸命に人材を育成した結果、何人かには、鹿大の学位が与えられた。たとえば、現在マレーシア・サバ大学(1992年設立)のボルネオ島海洋研究所では、研究者20人中4人が、本学の学位を有している。彼らの熱い視線が本学に向けられているが、こういう事実を知っている者は、本学では少なくなりつつある現状だ。

これで感じることは、いままでの輝かしい鹿大の成果が、単発的であったり、成果が点や線としてあり、面やネットワークとして組織的に共有されていなかったと思う。結果的に対外的にも印象の薄いものになってしまったのではないであろうか。今後は、企画、実施から評価までを国際戦略のもとで行われることが期待される。

3. 「ASEAN+J」とASEAN地域の開発

一方、目をアジアに転じれば、ASEANの経済統合のスピードは非常に速い。先ごろ、フィリピンで開催されたASEAN首脳会議では、統合の日程が早められ、2015年とされた。

下表は、この地域の主要国のデータだが、人口規模による格差もあるが、経済格差が、一人当たりのGDPでは、シンガポールとミャンマーでは、120倍の開きがある。また、シンガポール、マレーシア、タイのグループとインドネシア、フィリピン、ミャンマー、カンボジア、ラオスのグループとは、今後格差が広がり、2層に分化するのではないかと思われる。1997年のアジア通貨危機以降は、それがより顕著に現れているという。ASEANのなかで、言葉は悪いが、「勝ち組」と「負け組」とに分けられるのではないだろうか。今後ベトナムはある程度の経済成長を達成して、ASEANの中の中堅国家となる可能性がある。ASEAN内部における経済格差や政治格差が顕在化した今日、2015年統合までの道のりは険しいといわざるを得ない。

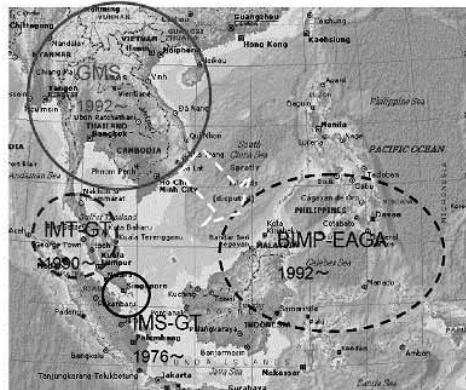
ASEAN諸国の主要データ（2003年）

国	人口 (千万人)	GDP (百万ドル)	一人当り GDP (ドル)
ブルネイ	364	4,715	12,973
カンボジア	13,798	4,215	305
インドネシア	213,494	208,625	977
ラオス	5,618	2,043	364
マレーシア	25,050	103,737	4,141
ミャンマー	53,515	9,605	179
フィリピン	81,081	79,270	978
シンガポール	4,185	91,355	21,829
タイ	63,950	143,303	2,241
ベトナム	81,185	39,021	481

出典：ASEAN

ASEAN内の地域開発に関して、70年代には、シンガポール、マレーシア、インドネシアの三国による成長の三角地帯（シンガポール、バタム、ビンタン島開発計画）から始まり、インドネシア側の島嶼部には、シンガポール資本による工業団地の造成が始まり、輸出志向企業が進出した。下図は、70年代以降の地域開発イニシアティブを地図上に示したものである。

ASEAN内の地域開発イニシアティブ



80年代には、インドネシア、スマトラ北東部のメダンを中心とする地域とマレーシア北部とタイ南部の成長の三角地帯構想もあったが、治安などの問題で実現していない。

90年代には、インドシナ5カ国と中国南部(雲南省など)を含めたGMS (Greater Mekong Subregion, メコン地域開発計画) がアジア開発銀行 (ADB) 主導により始まり、現在も進んでいる。将来、この地域が農林水産業や工業の一大生産地帯として、またマーケットとして機能することになると確信している。

この計画 (通称「GMS」) では、ADB主導で物流開発、産業開発、環境対策など総合的なアプローチと産学連携による地域開発が推進されている。物流開発の例では、2006年12月には、タイとラオスの国境をはしるメコン川に第二メコン架橋が円借款 (ODA)

により、完成した。これによって、東側のベトナム・ダナン港からラオスを通り、東北タイを抜けて、中部タイをとおり、ミャンマーまでの、インドシナを東西に貫通する物流経路が完成した。ただし、ミャンマー内は、まだ道路や港湾の整備が一部国境地区を除いて出来ていない。この道路網（「東西経済回廊」という）により、域内の物流が確実に加速されるはずである。経済回廊はこのほかに、南北経済回廊（中国雲南省からラオスを抜け、タイに至るルート）や第二東西経済回廊（タイ南部からカンボジアを抜けて、ベトナム南部までのルート）などがある。

GMSは、インドネシア5カ国と中国南部を巻き込んだ「面」としての開発であって、成長エンジンがタイであり、補助エンジンがベトナムである。現在、この地域が、ASEANの中で、最も元気のある地域であるといえる。

一方その地域の対立軸として、ASEAN島嶼部（フィリピン南部、マレーシア、インドネシアのボルネオ、インドネシアのスラウェシからイリアンジャヤまでの4カ国）の開発構想（BIMP-EAGA）がある（BIMPはブルネイ（B）、インドネシア（I）、マレーシア（M）、フィリピン（P）の頭文字をとったもの。EAGA（East ASEAN Growth Area）は「東ASEAN成長地域」の意）。対象地域はブルネイ、マレーシア（サバ州、サラワク州）、インドネシア（カリマンタン）の3カ国が領有するボルネオ島、フィリピンのミンダナオ島を含む島嶼地域（地図参照）で、ブルネイを除く3カ国の首都からは離れた辺境地域ある。

この地域の将来性は、豊富な海洋資源、鉱物資源、森林資源をはじめ、生物多様性の面からも比較優位の高い地域である。

この地域の特徴は次のようである。

- ①豊かな森林資源（域内の60%が森林）、鉱物資源（石油、天然ガス、石炭）、漁業資源に恵まれている。
- ②農業が基礎産業（コメ、パームオイル、ココナッツ、ゴム等）。
- ③域内の交通インフラが未整備。航空・海上の直行ルートが少ない（域外のハブ港を経由）。
- ④治安面でのマイナス・イメージがボトルネックである。特に海賊問題が深刻。

2005年12月にマレーシアで東アジア首脳会議等が開催された際に、第2回BIMP-EAGA 4カ国首脳会合が開催され、2006年より今後5年間の「開発のためのBIMP-EAGAロードマップ」に着手することを含む共同声明を発表。ドイツやオーストラリアが協力を表明している。この地域に、日本が本格的な対応を見せていないのは残念であるが、私はいずれ、この地域の重要性は再認識されると確信している。

BIMP-EAGA地域の地図



4. ASEAN地域の地域課題

ASEANのように、途上国が主体となって統合する場合には、国境を挟んで異なるソフトとハードのインフラ・制度の違いが顕在化している。私は、タイとミャンマーの国境（メイソットとミヤワディ）をはさんで、双方のインフラ（道路、ビル、排水施設、車両）の違いに愕然としたのを覚えている。

ASEAN諸国は、このようなSubregionレベルの地域開発だけでなく、域内で必要な共通課題解消、基準作りや人造りにについても、一生懸命取り組んでいる。例えば、域内の共通関税表など貿易や物流に関する基準はまったなしである。しかし、統合は良いことばかりではなく、国境を挟んだ地域横断的な問題も顕在化します。それらがこういう地域の開発課題として浮かび上がってくるのである。下記は、1. に、国境がある故に起こる負の問題を列記した。2. には地域として、制度とか、重要なインフラを共通化して、地域の発展につなげるための課題を列記した。こういう課題が、地域の開発にニーズになっている。

1. 国境越える課題

- ・感染症： HIV/AIDS, マラリアなど
- ・動物疫病：新興感染症（SARS, 鳥インフルエンザ）、口蹄疫など
- ・犯罪： 薬物, テロリズム, 海賊, 人身取引
- ・環境：森林, 国際河川, 海岸線, 酸性雨, 煙害

2. 地域経済社会発展の平準化に寄与する課題

- ・交通網整備 道路, 空港, 港湾
- ・配電網整備
- ・通信網整備（IT網含む）
- ・物流整備 税関整備, 出入国管理, 動植物検疫（CIQ）
- ・地域開発, 観光開発, 高等教育
- ・基準認証整備
- ・防災対策

5. 鹿児島大学の戦略的展望

鹿児島県から南に伸びる孤状の島嶼群—南西諸島は、その社会文化面、地理風土面および動植物生態系について、地球上の他の地域に比べて極めて多様性に富んでいる地域である。南西諸島は、UNESCO世界遺産の自然遺産（屋久島）と文化遺産（琉球王国のグスク及び関連遺産群）を獲得していると同時に、各島独自の文化を有している。また、この島嶼開発に関しては、戦争直後から、保健医療をはじめ、環境対策、インフラ整備など地道な方策が採られ、世界に稀に見る長寿社会、環境対策や観光開発など数々の成果を残している。

この地域をフィールドとする鹿児島大学は、地域に根ざした教育・研究を実施している。それらの教育・研究は、地域文化研究はもとより、医学、農学、水産学、理学、工学などすべての学問領域に達している。

一方、アジア、太平洋の島嶼地域は、地球温暖化や環境変化に対応に迫られているとともに、「周辺」ゆえに、先進経済や経済のグローバル化から取り残され、環境問題のほか、社会経済問題も引き起こしている。この地域は、地球規模の問題の真ただ中にあるといっても過言ではない。

このような背景のもと、鹿児島大学は、島嶼開発に関する大学と地域のリソースを総

動員して、アジア・太平洋諸国の島嶼開発にかかる人材を養成するプログラムに活用できると確信している。

鹿兒島大学が今後とも、ASEAN地域、とりわけ島嶼部の開発に関与するには、学部横断的なクラスターを形成する必要がある。下図は、島嶼開発のモデルを図式化したものだが、「環境」、「開発」、「保健医療」の分野（クラスター）を統合して、島嶼開発の教育研究を推進するものである。

